

郷土室だより

第 22 号

昭和53年 9月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電話 543-9025

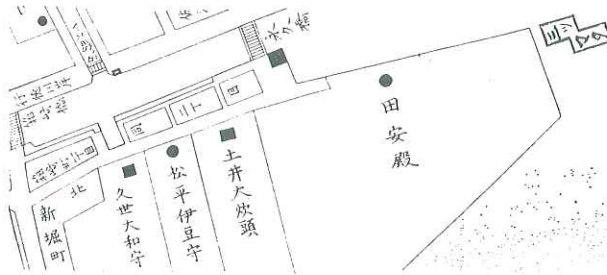
切絵図考証 九

安藤 菊二

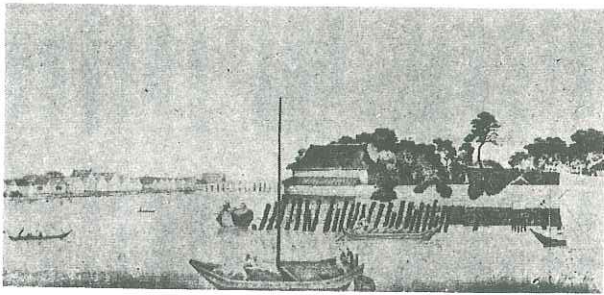
第12 箱崎町

○箱崎の田安家下屋敷

中洲の地が文字どおり中洲をなして、葎や
芦が生い茂り、涼風吹き渡っていたころ、三
股の流れによって浜町と地を隔てる箱崎の地
には、町屋としては南端に一筋町の北新堀、



尾張屋版「日本橋北内神田両国浜町明細絵図」
安政6年(1859年)



佐竹曙山 隅田川みつまたの景
(小野忠重著『江戸の洋画家』から転載)

東端に箱崎町一・二丁目のわずかな町屋があ
るばかり、土地の八割は大名屋敷がこれを占
めていた。

地区の北部の過半を占めていた箱崎町四丁
目は、延宝・天和のころには、堀田対馬守と
阿部美作守の邸がこれを領し、南隣朽木伊賀
守邸との境は、一筋の堀割があつて二地を割
いていた。

元禄年中、この二地区は阿部豊後守の邸地
となり、堀割は埋立られて一続きの土地とな
った。面積は八、七七七坪を算した。

その阿部家の邸地が田安宗武の下屋敷とな

ったのは延享三
年(一七四六)

十一月六日であ

った。宗武は英

名をもって聞え

た八代將軍吉宗

の第二子。享保

六年(一七二一

)江戸城田安門

内に邸地を与え

られて一家を興

し、田安家を称

して新たに將軍

家の藩屏となっ

た。延享三年一

○万石を承けた

時に、この箱崎

と深川高橋とに

下屋敷をおいた。

田安家は宗武の第九子、第五男の大
藏卿治察が嗣いだ。五才年下の賢太郎

君一後の松平定信一同ともに、限りな
い行末を嘱望されていたのに、借くも

二十三才の若さで他界した。

土岐善麿博士の大著『田安宗武』に
世子の没後、その死を悼んだ師の大家

孝純が『克一堂遺稿』を纏め、これに
は詩編八二首と五篇の文章が収められ

ているとして、その内の箱崎の別荘に
遊んで詠んだ詩が三首載せてある。私

は土岐博士の博搜によって勞せずして
その遺篇に接し、深い感動に駆られて

その詩をここに写した。

秋日遊箱崎別荘

江亭堪避暑。曲檻俯長流。

潮漲三叉口。橋跨二国秋。

漁人歌且去。鷗鷺没還浮。

自有橫汾興。遙思漢王遊。

早春遊箱崎別荘

別荘城市外。高会艶陽辺。

簾色連朱戶。鷺声入綺筵。

橋橫三派水。岸繫二州船。

日落飛柳雪。心催兔苑篇。

遊箱崎別荘得寒韵

長江斜接曲闌干。万里秋風雁影寒。

水澗孤亭天上坐。雲晴二總画中看。

ひとり田安家のみならず、箱崎の地

を占めた大名屋敷の高樓の、ほしいま

まなる眺望が眼前にほうふつとして浮び上ってくるのを覚える。

× × × × × ×
自然の景観が今日ほど破壊されず、自然と人工とが適度の調和を保っていた江戸時代には、江戸市中近郊にかけて、いたる所絵師の詩魂を掻き立てる佳景に充ち満ちていた。清長・北斎・北寿・広重・魚屋北溪といった浮世絵師達が、数多くの江戸の風景画を遺してくれた中で、広重は江戸八景どころでない、「江戸百景」を、その風景版画のシリーズの標題として扱んだほどに……。

ごく狭く、江戸の勝景を八景に限定してしまえば、帰帆といい、晚鐘といい、暮雪といい、落雁といい、自ら帰する所を一にしてしまうわけだが、箱崎の田安家で、天保十一・二年頃撰定した箱崎八景の巻物が、幸いに遺って都立中央図書館の蔵架にある。

巻子は、巻頭一尺ほど金泥紙を置き次いで淡紅色の色紙に、岩波延縁の筆で、函崎八景の四字を題し、以下吉田簡齋豊風の描く破墨八景図に、成島司直、北村季文、成島良譲、北村湖南、坂昌成、菅原信盛、坂昌功、菅原信教といった人々が各題賛の和歌を記し、巻尾に七四翁岡田頼忠が、卷子成立のいきさつを誌して跋文としている。

ここには八景の和歌のみを掲げる。 佃島夕照 法印季文

かたそぎのち木の夕陽はさしながらしまかげくらき浪のさとかな

深川夜雨 図書頭司直

たれこよひかはすちぎりの深川や雨しづかなる里のかりねに

永代橋帰帆 湖南

朝なぎにいでにしふねもかへるさのゆふべのはしをひとそぐなり

靈巖晚鐘 良譲

浦かぜも音吹そへてあはれなり夕の寺の入相のかね

石場晴嵐 信盛

海はれてうらにしらぬあらしをもいしうつ波のをとにきけとや

中洲落雁 昌成

河なかのすさぎのあしもうちなびきはかぜきほひておつる雁がね

三又秋月 信教

かほみづのながれをわけてみつしほにひかりさしくるあぎのよの月

筑波暮雪 昌功

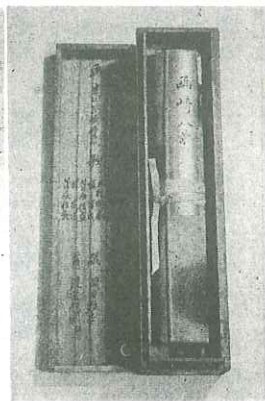
うす墨の筆の跡をもつくばねや雪のひかりにくれ残らむ

箱崎の田安邸は明治五年十二月上地され、二年の春土佐の山内容堂公が払い下げを受けて居邸とし、林泉の手入れを加え、林園頗る観るべきものがあ

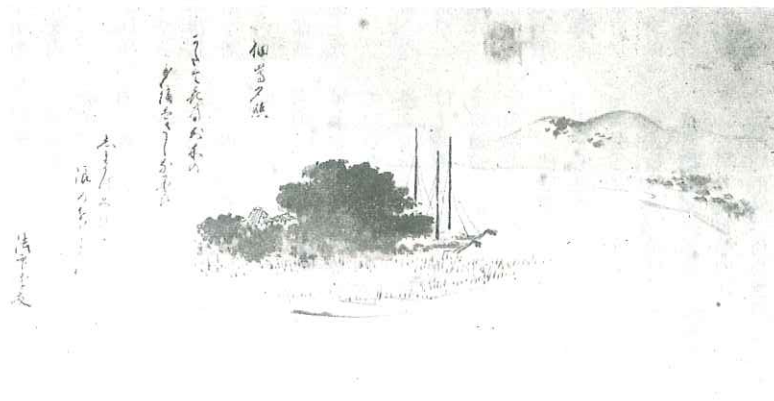
った。 この山内邸について『明治園芸史』に次の記事がある。

旧土州藩主山内容堂老公は王政復古朝議革新の鴻図英謨を翼賛せられて真臣下より幾多の豪傑輩出し、大政に参与し、機務を画策したるを以て、老公は功成り名遂げて、明治の初に旧徳川三卿の一たりし田安中納言の箱崎町中屋敷を得て之を居邸とす。此邸は東南北の三面共に大川の三叉に突出して、東南に水門を設け、之より潮水を邸内大池に入せしめたる古苑有りけり。容堂公新に邸の北面に松皮葺の大館を締構せられしが、欄干曲折して大江に俯臨し、湘簾巻舒して水波に掩映したる光景は、川口橋の河岸通より水を隔て、之を望むに、宛然たる蜃宮貝闕の鶴も斯くやあらんと想像せられたり。

抑も容堂公の豪興は特に世上に鳴りし所なるが、或は伎楽を召して楼船を泛へ或は筆陳を張りて墨客を戦



卷子「函崎八景」



佃島夕照「函崎八景」より（東京都立中央図書館所蔵）

はせ、或は良辰美景に逢ふや、其愛妾を携へて傲然浅草に往き深川に遊び、俳徊逍遙せらるゝ時に世人は皆之を視て、其容堂公たるを識り、就れも路を譲るに至りけるは、我が屢々目撃せし所なり。老公此の如く豪遊を縦にして、以て太平を樂み、晩年を送り給ひしが、此邸在米園池に就きては別に改修補造を加へられし事を聞くに至らず、老公薨後に及びて、印刷局より職員を派遣して此邸の園池景色、並に園中新築の西洋風樓館を撮影せしめたる大阪の写真二葉有り、蓋し洋館の構造は、今日より之を觀れば更に賞揚すべき所に非ずと雖も、當時に在りては頗る世人の聳目を博取したるものなりとす。それゆえにこそ印刷局撮影の材料とはなりにけれ。是亦第一期間に於ける世上の工芸景況の一斑を卜知するに足る可し。(『明治園芸史』)

○土井大炊頭

下総古河八万石の太守。中屋敷であるが『江戸藩邸沿革』に記録を欠き、邸地の沿革は詳かでない。

「土井氏は利勝を以て中興の祖となす。利勝初め徳川氏に仕へて千五百石を食む。慶長七年万石を賜ふて候籍に入り、叙爵して大炊頭と称し、

下総小見川を治む。其加封相次ぎ、佐倉に移治して十七年一万二千石を賜ふ。元和元年大阪の役に功を以て二万石を加封さる。寛永三年老中となり、二万石を加封し、古河城に移治す。十五年大老に補し五万石を加へ、通封十六万石に至る。延宝三年帯刀利久早世して嗣無く除封され、更に六万石を支封利益に賜ふて祖を継ぐ。後各地に転封し、宝曆十二年利里古河城に復封す。爾後世襲し文化五年利厚老中に補し、一万石を加封す。後四世利與に至って維新となる。明治二年六月、古河藩知事となる。(『列藩要鑑』)

○古河藩中屋敷となる前は、福知山藩朽木家の中屋敷であった。『江戸藩邸沿革』福知山藩の条下に、

一、中屋敷 北新堀
 拝領年月不詳。切坪相對替宝永三年十一月廿三日、残地相對替享和三年四月十一日。残地坪数四千五百廿八坪。

承応以降各地図ニ載ス。
 府内沿革図書、朽木伊予守屋敷、宝永三戌年切坪相對替ニテ北之方戸田采女正屋敷ニ成、残地所、享和三亥年相對替ニテ土井大炊頭屋敷ニ成。

(市街篇四九一七四三頁)

これによって、この地が土井家の邸地になったのは享和三年(一八〇三)だったことが知れる。箱崎の地を「朽木島」と称したと伝えるのも、朽木家が久しくこの地にあつたからにほかならない。

○松平伊豆守

豊橋藩、旧封七万石。後の子爵大河内家の下屋敷である。『江戸藩邸沿革』に

一、下屋敷 北新堀
 拝領寛永十年二月廿九日(家譜)、増地正徳二年五月四日。同享保十六年三月廿五日切坪上地、宝曆十年十月五日、上地元治慶応ノ頃坪数三千式百拾八坪。
 明暦以降各地図ニ載ス。

(中略)

府内沿革図書、享保十六年三月御船手頭役屋敷明地北続松平伊豆守添地ニ被下。家記、享保十六年三月廿五日、如願北新堀倉屋敷明地於三南隣、元御船手大河内又十郎政真役屋敷跡九百三拾坪為添地ニ賜之、於深川下屋敷之内ニ差上之。(以下略)(市街篇四九一四二七頁)

○箱崎の松平邸は、智慧伊豆といわれた松平信綱の後裔で、信綱執政の頃の機密の日記数冊を存し、候家では特別



永代橋帰帆「函崎八景」より(東京都立中央図書館所蔵)

大切に取扱ひ他見を禁じ、この箱崎の別邸に格納されていたが、文政十二年の大火災で灰燼に帰してしまつた。

松浦静山侯の『甲子夜話統篇』に、吉田侯（今松平伊豆守信順、寺社奉行）の家に、祖先信綱執政の時、御機密の日記数冊あり。子孫と雖も見ることを協はず。代々直封にてこの侯家に収む。侯家にも大切なる物ゆゑ火災を慮り、箱崎の別邸は河辺にて火遠なる処なればとて、これに蔵むる小庫を建て籠置しが、この三月二十一日の災に、この庫も火入て、その旧記鳥有となれりと、惜しむべきならずや。（中略）又聞く、豆州の家臣某歎息して云ふは、この秘冊は家の寶といへども、子々孫々覽ること協はざることなれば、焚亡せしこそ時なり。惜しむべき物にも非ずと、信にかかることならん歎。

と記しているのも、うべなりと言わねばならぬ。

○久世大和守

下総葛飾郡関宿、五万八千石。久世大和守広周（ひろちか）であらう。文政十三寅十月家督を継ぐ。

久世氏は本姓は源氏なり。三左衛門広宣を以て中興の祖となす。広宣に至って徳川氏に仕ふ。天正十八年家

康に従つて東遷す。上総の横田五百石を食み、元和元年大阪の役功を以て二千七百石に加封され、慶安元年五千石を加封され、寛文三年万石に加封され若年寄に補せらる。尋いで老中に進む。七年二万石を加封され下総関宿城に移封す。明治元年広文譜に触れて退隠し、養子広業四万八千石を賜はりて宗を継ぎ、二年六月関宿藩知事となる。（『列藩要鑑』）

○田沢宗伯

弘化二年十一月に、寄合医師の田沢宗伯が、箱崎町二丁目に町屋敷を拝領した。宗伯の手記に成る『天保日記』に、その屋敷拝領の際の手控えが書留めてある。

拝領、町屋敷

寄合御医師

箱崎町式丁目

田沢宗伯

間口田舎間七間一尺五寸、奥行田舎間拾七間五尺、裏行田舎間七間裏中田舎間拾六間五尺七寸。

坪数百貳拾六坪余。

右町屋舖内住宅仕候。残地町人共え貸置申候。

（略）

高拾五扶持

本國出羽 生田武藏

田沢宗伯

己六十五才

文化十三年十二月廿三日養父願之通跡式無相違被三下置、普請入被二

仰付。天保十四卯年十一月五日御学館寄宿人儒学教授可仕旨被仰付、同月廿七日小普請御役金御免被仰付、同十二月廿七日五節旬月次御禮罷出旨被仰付、弘化二巳年十一月廿三日寄合被仰付候。拝領町屋舖箱崎町式丁目住宅仕候。宗伯は和歌の嗜みも深く、当代の国文学者や歌人も交際があつた。『天保日記』は、彼の歌日記と称してもよく、その日常生活の一端が知られてくる。

といふを書おきて身まかりければ、廿七日同じ題にて人々かなしみのうたよむときよて露にあへてうつるふ山のみみち葉を物思ふ袖にたぐへては見ん 亜元法師の蛇山の庵にて杜宇をきよて

一声もまだ聞ぬ間に杜宇きなきとよもす里も有りけり

など、そのほんの一例にすぎない。

宗伯は蔵書家でもあつた。『函崎文庫』の印記を捺す書は、すなわち宗伯手沢の本であることを示している。

田沢宗伯蔵書印

（『蔵書名印譜』による）



◇東京を語る会 第25回

日時 九月三十日（土）

午後一時三十分～午後三時

演題 銀座その二「銀座物語」余話 講師 小楡山俊氏

（読売新聞社文化部）